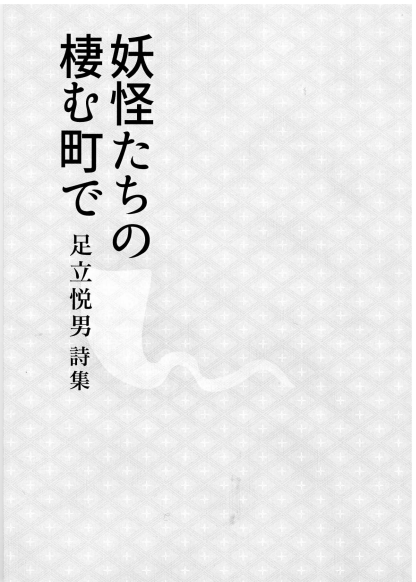


妖怪たちの 棲む町で

足立悦男詩集



【書評】足立悦男詩集『妖怪たちの棲む町で』詩誌「菱」の会刊 A5判 七九ページ 定価八〇〇円(税込)

酒井 董美

ただよし

令和3年11月に出たばかりの本である。著者は昭和22年(1947)境港市生まれの住民で、妖怪博士(初級)。詩誌「菱」の同人でもある。

境港市は水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」を生んだ妖怪の町でそれを中心にした町づくりで知られている。著者は境港商工会議所と境港市観光協会が主催する妖怪検定で、妖怪博士(初級)の認定を受けた。この検定は「妖怪の権威、水木しげる先生の妖怪考察を通して妖怪に対する理解度をはかる」「当地検定」として毎年実施されている。所要時間は60分という。そのような著者が蘊蓄を傾けて作ったこの詩集の作品は、普通の叙情詩とは異なり、実に不思議な雰囲気漂わせている。内容は「あとがき」を別にして「1鬼太郎列車」「2鬼太郎のゲタ」「3鬼太郎の父」の3部分に分かれ、それぞれ8編の詩で構成されている。

ところで前述したように境港市全体が、水木しげるの誕生地として町づくりを行っている。まず水木しげるロードには177体の妖怪ブロンズ像が並んでいる。そして水木しげるの世界を紹介した水木しげる記念館がある。一方、JR境線の停車駅名も出発の駅が、ねずみ男駅(米子駅)、終点の駅を鬼太郎駅(境港駅)としており、途中の駅名も砂かけばばあ駅(大篠津町駅)など妖怪の名前が付けられている。列車にも鬼太郎列車、目玉おやじ列車、ねこ娘列車、ねずみ男列車があるくらいなのである。

本詩集は、それらを題材に作られているので、妖怪たちの代表的な一人一人についての詩も、さすがに妖怪博士である著者らしく、的確にその特徴をつかんで表現され、読者をいっしょに夢幻境に誘ってくれる。また、水木しげるが第二次大戦で駐在していた、ラバウルの原住民トライ族とのほのぼのとした交流や、子ども時代に世話になったのんのんばあから聞いた妖怪についての話なども盛り込まれ、この詩集から、水木しげるが何者であるかが理解できるようになっている。

島根大学名誉教授で広島大学国語教育学博士である著者らしい、一風変わったこの詩集に、ふるさと境港市をこよなく愛する心情があふれている。

本書を境港市を訪れた人々への記念品として、紹介するのもいいのではなかろうかと筆者は思ったのである。

(元島根大学法文学部教授・口承文芸研究者)